

報 告

日本水彩畫會大阪支部會告(三月十日)

△第一回寫生會は三月一日坂神電鐵梅田停留場に午前七時集合し大和田、佃島に向ひ、各自寫生二枚を得て全日午後三時降雨のため散會す。來會者大隅直造、大塚正秀、松代安太郎、吉田覺衛、齋藤清次郎、北山清太郎、大塚作次郎の七氏なり。次回寫生會は來る三月十五日堺住吉方面に出動し、第三回(四月一日)は木津川附近の豫定なり。

△三月の研究會は人體部と石膏部の二部に別ち。毎夜七時より十時迄とし事務所にて同月六日より開始し來る十九日を以て閉會の都合にて有之候。人體部の第一週間は男のモデルにて引舟の姿態にて次週間は女が來る豫定。石膏部はホーマンを使用せり。第一週間の研究生は人體部大塚作次郎、大塚正秀、木村貞一、北山清太郎、石膏部左山鐵三、三宅周藏の總て六名なり。次週間には三四名の研究生増加する筈なり。

△太平洋畫會寫生團を迎ふ、三月四日午後八時四十分一行を載せた列車は梅田に着いた主なる方々は大下、吉田、中川、小杉渡部其他二三の先生方にて、大下先生の支部御來臨は都合で歸途一泊の豫定で、親しく互評例會に臨まるゝ由。

△第四回寫生會は來る四月十五日午前七時難波停車場に集合し堺方面に向ふ、同第五回は五月一日午前六時三十分梅田停留所に集合し六甲山附近に各畫食携帶費用自辨の事。

△四月の研究會。四月三日より全十六日迄の二週間開催、時間其他は前回に全じ、會費人體部一圓、石膏部七十錢申込は四月三日迄、會費は開始の初日に御持參の事

△第二回(四月)互評會は十五日午後六時より全十時迄と、十六日(日曜日)午前九時より全午後四時迄開催す、來會隨意(會員に非ざる者にてても)出品畫は十三日中を以て締切と致申候。

△大阪在住(其他地方在住)『みづゑ』讀者諸氏に告す。前號『みづゑ』誌上にて發表せし會則の如き趣意を以て茲に大阪支部を分設仕り候に就き、此際御入會相成度、種々研究上の便宜を得申候は勿論、相互に興味者の交際も出來得可くと存候へば大いに御賛成あらん事を希望仕り候(會則入用の方は二錢切手封入申込まれたし)大阪市南區大寶寺町中ノ丁一五一北山清太郎方 全支部

\* \* \* \* \*

- 大阪支部入會者左の如し
- 大阪市北區眞砂町十番地 大塚作次郎
- 全東區農人町二丁目五七 大隅 直造
- 全南區長堀筋二丁目大福方 大塚 正秀
- 全北區浪花橋樋上町角 小川仁三郎
- 全全區天神橋通一丁目中野吳服店吉田 覺藏
- 全全區堂島濱通一丁目六六 松代安太郎
- 全全區曾根崎新地一丁目 齋藤清次郎
- 全南區大寶寺町中ノ丁一五一 北山清太郎

全全區順慶四丁目四六

木村 貞一

全全鍛冶屋町二三九

佐山 鐵三

以 上

## 寄 書

### 日本水彩畫會大阪支部寫生行

大阪 大隅 直造

三月一日、日本水彩畫會大阪支部の第一回寫生行は、阪神電軌沿線佃附近に開かれた。當日は幸に好晴にして、寫生日和とても云ふべきか、天は吾等の舉を賛したのであらう。午前七時半梅田に會員中の有志一同集合なし、同五十分電車に打乗りて出發す。間もなく、大和田に着し、こゝに下車なして徒歩佃に向ふ。途中には見るべき畫題も多くありて、足を止むる事も屢々なりしも、總て午後割愛なして、程なく目的地なる佃に達す、鐵橋を越えて小川のほとりにSK、KY、SSの諸君と僕とは三脚をすへた、無言にて筆を運ばす事約二時間、一同寫生を終り、SK君の批評及注意等あり。それより、晝食を喫して大和田の森を寫生に行く。MO君は何處に行かれしか、數度呼べども答へもなし、かかれて約束もあれば其儘に行きて、適當の場所に腰を下して森の輪廓の漸く終りし頃、さしにも晴れし空は、いつか雨雲に掩はれて、果ては雨さへ降り初め、一同の口より思はず残念の一聲は洩れた、然し幸にして後方土堤下に新築中の家ありしかば、直ちにその中に入りて、引續き寫生をなす。

時雨と思ひし雨は、漸やく降りつゝのりて今は致し方もなく、遂に中止となり森の圖の終ると共にOM君と歸り來られしかば、打揃ひて歸路に就く。斯くの如く第一回は不成功に終りしも、近日第二回舉行の議あり、當市附近の同好者諸君、來りて僕等と行を共にせずや。

## 面 影

和歌浦 不 圖

檣の梢をよする寒風がどう／＼と、大波でも寄すなかの様な音のする日は實に寒い。日曜には至つてこんな片輪な日が多い。今日も矢張り片輪の域を脱することの出来ない程寒い日和だ。吾が輩は別にこんな日を好んだ譯でも撰擇した譯でもないが、不斷ずばらな男は、何の因果かこんな日に巡り遇ふことが珍らしくもなければ別に取り立てて不思議がる暇もないからカバンを肩に郊外に出た。

探し廻つて居ると小さな丘が大きな山に捨てられた様に、田圃の中に獨り座はつて居る。中腹から上は若松が並んで、天氣の都合でホワイトを多く含んだ綠色を示して居る。下は黄色を多分に有つた枯草が奇麗に包んで居る。一寸ものに成り相だから始めることにした。

輪廓を終る迄は、歩行した勢で稍我慢も出來たが、着色にかかつた頃は、足の爪先から手先と言つた順序に小振動を始め、遂に全身に及んで來た。「既に我が事止ぬる哉」と言ふ文句は恐らくこんな場合に間に合ふ逃げ道で、墮落に進む一里塚だ。進む